

め で る

中河内集会所



「夏の宿泊研修・中河内集会所（長浜市余呉町）にて」

- 2 スポットライト
湖北地域の医療福祉の現状と課題
長浜市役所健康福祉部健康推進課 課長 横田 留里

- 4 特集
平成30年度 夏の宿泊研修 in 長浜市・湖北方面

- 15 地域自慢
長浜市余呉町

- 16 「人」
長浜市立湖北病院 副院長（小児科部長） 東野 克巳

- 18 病院紹介
医療法人敬愛会 東近江敬愛病院

- 20 紹介
滋賀医科大学男女共同参画推進室／
滋賀県医師キャリア・サポートセンター

- 22 報告
開催報告

- 23 ご入会・ご寄附のご案内／
参加者募集／編集後記

Contents

湖北地域の医療福祉の現状と課題

長浜市役所健康福祉部健康推進課 課長
横田 留里



長浜市は、滋賀県の東北部に位置し、北は福井県、東は岐阜県に接しています。周囲は伊吹山系の山々と、琵琶湖に面し、中央には琵琶湖に注ぐ川により形成された豊かな湖北平野と水鳥が集う湖岸風景が広がり、県内でも優れた自然景観を有しています。

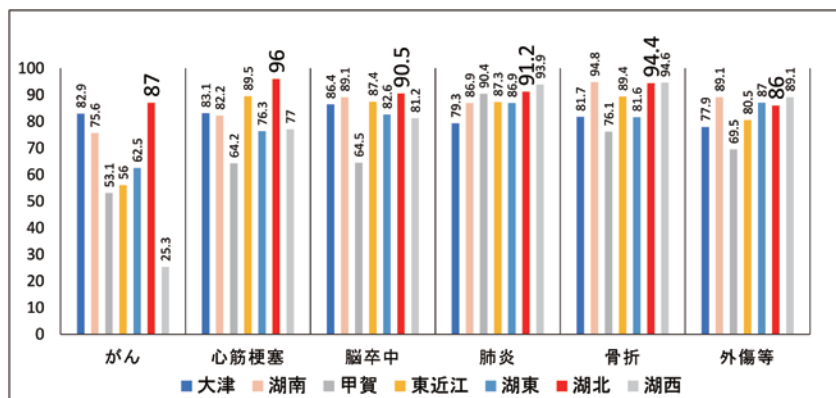
また、北國街道や、戦国時代を偲ばせる長浜城や小谷城跡、賤ヶ岳、渡岸寺の国宝十一面観音をはじめとする数多くの観音が祀られる観音の里など、すぐれた歴史的遺産を有しています。1市8町が合併し、現在の長浜市となりました。

【県内トップの区域内完結率】

長浜市には、市立長浜病院、市立湖北病院、長浜赤十字病院、セフィロト病院の医療機関があり、湖北地域の医療を支えています。湖北地域の医療の特徴は、県内トップの区域内完結率の高さです。それぞれの病院の切磋琢磨により高度医療が提供され、どの疾患についても概ね区域内で供給できており、市民が安心して医療を受けられる体制が整っています（図1）。

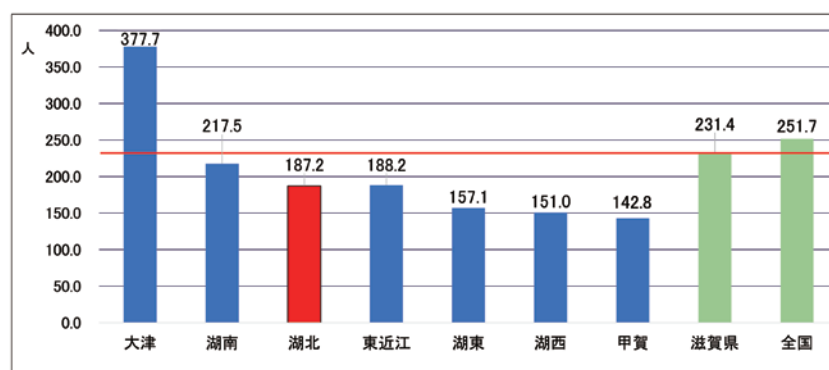
しかし、湖北地域も医師不足は大きな課題となっています（図2）。人口10万人対医師数は、全国平均、滋賀県平均を大きく下回っており、診療科間の医師数に偏りがあります。そのため、各病院が得意分野や特徴を活かし、患者さんの症状に合わせて役割分担・連携を行い、よりよい医療を受けられるような体制を整えていただいています。湖北の高い区域内完結率は、診療にあたる医師ひとり一人の努力と使命感により支えられている現状もあり、医師の働き方改革への取り組みも課題となっています。

図1 構想区域ごとの区域内完結率



出典：滋賀県地域医療構想データより作成

図2 滋賀県内医療圏域別医療施設に従事する人口10万人対医師数



出典：平成28年医師・歯科医師・薬剤師調査

【病診連携による地域包括ケアシステムの推進】

長浜市の人口は毎年減少している一方で、高齢者人口は増加していくことから、これからはさらに複数の疾患を持つ患者が増え、診療に迅速かつ慎重さが求められます。湖北地域のもう一つの特徴は、病診連携や訪問診療、訪問看護が充実しており、急性期を脱した患者さんが早い時点で自宅に戻れる仕組みが整っていることです。平均在院日数が全国、滋賀県と比較して短く（図3）、在宅復帰や次の施設への移行が行われています。その結果、在宅看取り率も高くなっています（図4）。

湖北医師会には、「長浜米原地域医療支援センター」として在宅医療・介護連携推進事業を推進いただいており、各医療機関と湖北医師会の連携・協力により、質の高い在宅医療を提供できており、地域完結型医療体制が整っています。

【医療を支える人材育成のために】

湖北地域の地域包括ケアシステムの維持・発展のためには、医師の安定的な確保と働きやすい魅力ある環境づくりが必要です。長浜市では、歴史を活かし

たまちづくり、子育て支援など、住みたいと思っただけのまちづくりに力をいれています。

また、教育の分野では、湖北医師会、市立長浜病院、長浜赤十字病院の協力を得て、市内の中学校で「がん教育」を行っています。医師が出向き直接伝えることで、いのちの大切さを考え、医師を身近に感じ、医療職への進路をイメージしている生徒もいます。湖北医師会では、市立長浜病院、長浜赤十字病院の協力を得て、中高生を対象に「医師体験ワークショップ」を開催しています（図5）。このように、医師や医療を身近に感じ関心を持てるよう働きかけ、将来の医療人材を目指してほしいという願いで取り組んでおります。

湖北圏域の医療福祉の目標である「地域の誰もが、年老いても住み慣れた地域で、最後まで自分らしく、安心して暮らせるように」を目指して、今ある医療資源が有機的に機能するよう、関係機関のみなさんとともに前に進めていきます。

図3 平均在院日数

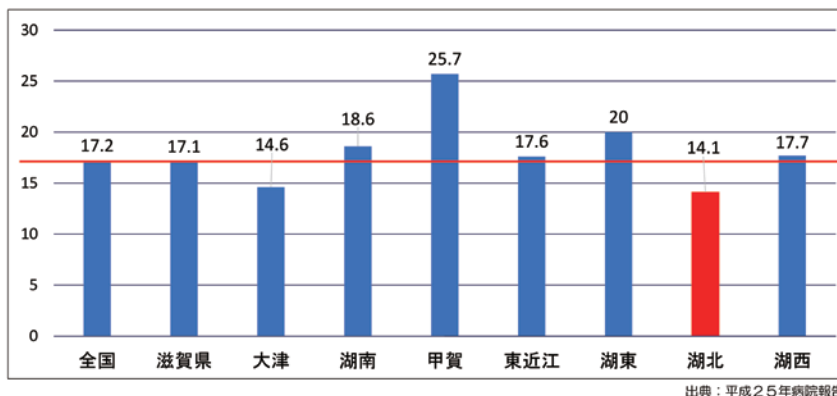


図4 滋賀県の自宅死の割合（H28.1.1～H28.12.31）

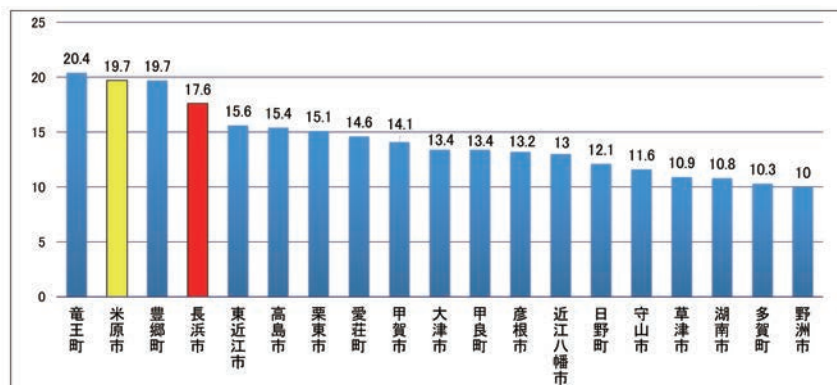


図5 医師体験ワークショップ



1日目

● 渡岸寺観音堂を見学

お堂に安置されている十一面観音を拝観しました。日本全国に七体ある国宝十一面観音の中でも最も美しいとされる観音さまです。



湖北地域の歴史についても学び、こんなにも歴史的に価値のあるところなのだと初めて知りました。

(参加学生感想より)

● 湖北病院を訪問

滋賀県で一番北に位置する病院を訪問しました。病院の特徴や医療過疎地区における冬季の積雪の多さなど、熱心に説明していただきました。



交通の便が悪いため病院までいきにくい高齢者が多く、往診や訪問看護を積極的に取り入れるなど、地域の課題に向き合っておられる姿を見て地域に根差した医療を感じた。

(参加学生感想より)

医療が十分ではないところの実情やその苦勞を知ることができました。

(参加学生感想より)

豪雪地帯である湖北ならではの苦難や対応するための工夫についても学ぶことができました。

(参加学生感想より)



平成30年度 夏の宿泊研修 in 長浜市・湖北

平成30年8月20日(月)～21日(火)

● 交流会

〔第1部〕講演会・意見交換会等

- ・長浜市長 藤井 勇治氏 からお挨拶
- ・浅井東診療所 所長 松井 善典氏
「診療所から見た湖北地域の医療福祉

～ケアの協調性をテーマに～

- ・長浜市健康福祉部健康推進課 課長 横田 留里氏
「湖北地域の医療福祉の現状と課題」

第1部では、藤井市長から、長浜地域の医療行政の状況についてお聞きしました。続いて、講演会では、湖北地域の医療や現状についてお話いただきました。

第2部では、研修先でお世話になった方々や里親、室員の先生方と情報交換を行いました。

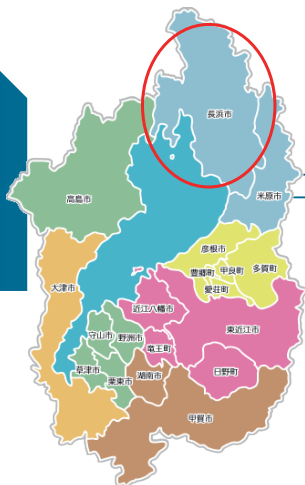
第3部（学生同士の交流会）



● 湖北病院中河内診療所を訪問

湖北病院副院長の案内で滋賀県の最北に位置する診療所を訪問しました。





*学生17名（医学生9名、看護学生8名）が参加しました。

2日目

●各診療所を訪問

永原診療所・塩津診療所・
中之郷診療所・湖北病院に分
かれて研修を行いました。



中之郷診療所



永原診療所



永原診療所



湖北病院

地域包括支援センターの利用者の
方はセンターの職員をとて信頼さ
れている様子で、職員の方も利用者
の生活の様子や考え方を細かいと
ころまで把握されていたのが印象的
でした。（参加学生感想より）

「チーム医療」の大切さを再度実
感しました。（参加学生感想より）



塩津診療所

医療資源不足によって使う
ことのできない医療器具も多い
環境においては、医師同士の
専門を生かした協力体制や、
診療所と病院の協力が欠かせ
ないと教えていただきました。
（参加学生感想より）

●長浜赤十字病院を訪問

副院長の案内で病院見学を
させていただいた後、滋賀医
科大学OBの医師と意見交換
を行い、交流を深めました。



研修医の先生にもお話を
伺うことができ、研修病院
選びの候補につながりまし
た。（参加学生感想より）



湖北地域の医療や
歴史を学び、人々の
温かさを感じること
ができました。医師
不足などでその病院
や施設だけでは解決
できないものは、他
の病院と連携し協力
しながら、その地
域の人々の健康を支
え、また、自分たち
の病院の強みや弱み
を考えて、それぞ
れの病院や施設が機
能しているのだと学
びました。
（参加学生感想より）

●市立長浜病院を訪問

看護科の科長補佐の案内で
病院見学をさせていただきました。
その後、滋賀医科大学
OBとそれぞれ意見交換を
行い、交流を深めました。



湖北医療圏では長浜市の南部に医療施設が固ま
っていると感じていて、広い湖北地域全体ではど
う回っているのか、過疎が進んだ地域の診療所の実
態はどうか、と疑問は多かったのですが、研修中
で、湖北地域全体で協力体制があり、地域は守ら
れているのだと感じました。（参加学生感想より）



今回も、地域の方々をはじめたくさんの医療関係者等
の方々に協力いただき、学びの多い研修となりました。
ありがとうございました。



松井善典先生から「連携」の大切
さをお話しして頂きました。施
設間・多職種間の連携のためには、
それぞれの立ち位置を知り、相互
理解する事がベースとなっている
事を知り、学生の内から、この研
修を通して、そのベース作りをさ
せて頂いていると実感しました。
（参加学生感想より）



●長浜市街を散策

長浜名物の『鯖そ
うめん』を堪能し、
ボランティアガイド
さんの案内で曳山博
物館・黒壁・大通寺
など長浜市内を散策
しました。



長浜地域の曳山は素晴ら
しく、心打れました。こ
ういった文化をはじめと
した滋賀県の北部の魅力
を、より多くの人に知って
もらいたいと思いました。
（参加学生感想より）

訪問先の皆様からのメッセージ

■ 湖北地域への宿泊研修を企画して ～訪問学生に伝えたかったこと～

東浅井診療所 所長 **松井 善典**



今回の夏期宿泊研修のコーディネートにあたって、これまで長浜の日赤・市立の両病院や、ケアセンターいぶきや浅井東診療所など湖北の南や東の実習となっていたので、エリアは北(旧伊香郡)と決めていた。

特に余呉地区は常勤医師が不在になってから、私含め様々な医師が交代で診療所を継続している課題の地域であり、また西浅井地区は2つの診療所が一つにまとまって複数医師体制をつくる準備中であり、そして木之本地区にある湖北病院は長浜北部の地域医療・へき地医療を守る重要な拠点である。

それぞれの医療や連携の現状を知ってもらうことで、同じ滋賀県といっても南北で事情が違ふこと、その北に位置する長浜市の中の南北でも医療課題が違ふこと、その「北の北」を体験して何か学び・感じてもらえたらと願って企画した。

初日の湖北病院での講演を依頼した辻本先生は滋賀医大の後輩で、家庭医として地域に密着して外来・入院・救急・在宅を担っており、ガイダンスにぴったりの人材であった。その後、本来は伝統的なお店や移住者で賑わっている木之本地区のまち歩きをしたかったのだが、残念ながら叶わなかった。

医療をみるときにそのまちの暮らし方や賑わいをみることも多面的な理解に繋がるため、今回は是非木之本のまち歩きを実現したい。夜の講演では長浜市の健康推進課の横田課長と一緒に講演させてもらったが、横田さんとはこれまで地域医療の課題を共有し、重要性の理解を深めたからこそその共演となって嬉しい時間となった。

2日目はグループに別れて、それぞれ診療所・訪問看護ステーション・地域包括支援センターでの実習を企画した。地域医療を継続するために個人の力には限界があり、行政の支援や仕組みづくり、各部署・医療機関の組織力や複数医師体制、多職種連携など不可欠なことなどが垣間見えたのではないだろうか。

次、湖北に来ていただくときには医療のみならず介護との連携、まちづくりなどをテーマに企画したいと思う。

■ 宿泊研修を受け入れて

公益社団法人 地域医療振興協会
西浅井地区診療所 管理者・
永原診療所 所長

上田 祐樹



今回、宿泊研修2日目に、学生さんたちの訪問を受け入れました。皆さん、滋賀県で生活していながら、びわ湖のてっぺんの町「西浅井」まで来る機会は殆ど無かったようでしたので、それだけでも良い経験だったかもしれません。

当院は、いわゆるへき地診療所です。施設としては小規模であり、限られたスタッフ、設備で運営しています。当院のような診療所が地域で力を発揮できるのは、他の医療・介護従事者、介護施設（これらも限られていますが）などの医療・介護資源、地域住民の理解・協力、後方支援の病院などのネットワークの支援があるからです。今回、この地域の限られた資源を知ってもらうため、診療所外の地域資源も見て頂きました。医療以外にも色々に関わることの多い地域医療の面白さを少しでも感じてもらえていたら幸いです。

前日には、懇親会にも参加させて頂きましたが、参加学生の皆さんからは将来への熱い想いを感じることができました。将来、滋賀の地域医療の第一線で活躍してくれることを期待しております。

■ 宿泊研修を受け入れて

塩津診療所 所長

木村 佳弘



9月に学部5年生の学生さんが研修に来てくださいました。大学から一番遠い診療所に関心を持ってくださったことに感謝します。塩津診療所は取り立てて特徴のない過疎地の診療所で、一日だけの研修でしたので、十分な研修をしていただけたか心許ないのですが、大学病院とは異なる種々雑多な悩みを抱えた患者さんを対象に、不確実性に直面し、限られた資源で仕事を進めるため、大学病院での診療とは異なる戦略が必要なことや、過疎地独特の苦悩などを感じ取っていただけると幸いです。

塩津診療所は、永原診療所と補完しあいつつ西浅井地区の医療サービスを担うため、地域医療振興協会が管理委託をうけて、西浅井地区診療所として一体的に運営しています。来年度に両診療所は統合されることが決まり、拠点診療所の工事が進められています。診療所の拠点化は、過疎地で、シームレスで持続可能な医療サービスを提供する一つの形と考えており、これを成功させることは我々の挑戦であると思います。

医学は、自然科学だけでなく、人文、社会科学も含めたすべての文化の総合科学で、地域医療はまさにその実践です。高度医療も先端医療も地域医療がしっかりしていればこそ恩恵にあずかれます。若い先生方が地域医療の大切さと奥深さを感じて、地域医療に誇りをもって参加してくださることを願います。

■ 訪問先の皆様からのメッセージ

■ 先輩からひとこと

長浜市立湖北病院 内科医師

辻本 健児



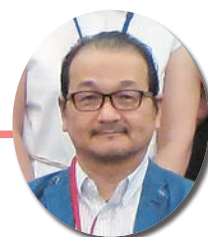
近畿地方の最北端である湖北は、高齢化率が約4割に達し、限界集落、中山間地域、豪雪地帯など、厳しい環境で暮らす方も多いです。加齢や慢性疾患、認知症、独居などで生活困難となっていく方には医療以前の問題が多く、医療・福祉・介護、単独では解決が難しいことが多々あります。お互いの職域を少しずつ越え合うような多職種連携が日々求められます。在宅医療・在宅看取りを大切にしようという文化・風土もあり、湖北は地域包括ケアを実践するのに最適な環境です。

私は長浜赤十字病院で初期研修をさせていただき、卒業以来6年間を湖北で過ごし、3年目から訪問診療、4年目から余呉町の国保診療所の外来を担当しています。医師不足の中、未熟でも実績がなくても、一人前として扱っていただき、期待をかけていただいたお蔭で、自己研鑽の励みをいただきました。また、滋賀医大、自治医大などの多くの先輩方から様々なご支援をいただきました。このような環境で医療人として研鑽を積めたことは、かけがえのない医師人生の糧と言えます。

■ 先輩からひとこと

日本赤十字社 長浜赤十字病院 副院長
(兼) 第一外科部長

塩見 尚礼



湖北に2つある急性期病院の一つで救命救急センターを擁する当院は、小児科、産婦人科による周産期医療や精神科救急にも特徴があります。数多くの手術症例数があり、大学では経験しなかった超高齢者の手術に携わることも多いです。急性期を過ぎると療養先を考えますが、湖北では慢性期病床数が少ないので地域の開業医の先生方の御尽力の元、在宅で過ごされる患者さんが多いです。このような地域のかかわりが強固なのが湖北の特徴の一つです。一方で、先進医療にも取り組んでいます。ダビンチによる前立腺手術だけでなく、厳しい施設基準をクリアして、県内では滋賀医大に次いでロボット支援腹腔鏡下胃切除を2019年から保険診療として行えるようになりました。私たち医療者は生涯学び続けなければなりませんが、幾つになっても新しいことにチャレンジできるのは幸せなことです。地域医療は勿論、先進医療にも触れることができる当院で一緒に働きませんか！

■ 宿泊研修懇親会に参加して

市立長浜病院診療局理事
産婦人科責任部長、手術室部長

林 嘉彦



2018年8月20日～21日と宿泊研修があり懇親会のみに参加させて頂きました。多くの学生さんとお会いでき有意義な時間を過ごすことができました。

思わず30年余り前の学生時代の頃を思い出していました。昔はお腹を空かしての毎日でした。食べていくことと医学書の購入と時々宴会で精一杯の学生生活でした。このような地域での研修など考える余裕はありませんでした。今日勤務医として地域で診療に従事する時、地域の歴史と文化を学ぶことの重要性を認識しています。歴史学者の井上清さんの言葉に「人は歴史によって生まれ、歴史の中に生きており、何らかの仕方で歴史をつくっている。」があります。

最後に30余年前もそうでしたが、試験を落したり留年したりで宿泊研修に参加する余裕の無い学生さんもいると思います。そのような学生さんも大歓迎ですので、いつでも病院見学に来てください。無限の可能性のある学生さんの奮闘を期待しています。

■ 先輩からひとこと

長浜市役所健康推進課 保健師

福永 まき絵



宿泊研修交流会では、学生の皆様や先生方とお会いし、とても楽しい時間を過ごさせていただきました。参加された皆様はきっと、長浜の美しい風景を堪能していただけたと思います。

私ごとですが、卒業後すぐに湖北にきて、十数年たちました。初めての仕事や湖北での暮らしにドキドキしながらのスタートでした。湖北弁が分からなくてトンチンカンな会話をしたり、道に迷ってしまったりと色々な失敗をしましたが、あたたかい住民さんに教えていただいたり、病院で活躍されている先輩方に助けていただいたりしながら、今まで続けることができました。学生時代はインドア派だったのに、湖北の美しい自然のおかげでスキーや自転車を楽しむようになり、プライベートも充実しました。これから湖北は超高齢化社会を迎え、医療や介護により一層の期待が高まります。また、健康寿命の延伸を図る健康づくりの重要性も高まります。一緒に地域の健康を守る仕事をしていきませんか。ぜひお待ちしております！

同行された先生のメッセージ

長浜市・湖北方面の医療と歴史・ 文化を学ぶ宿泊研修に参加して

滋賀医科大学医学部看護学科
基礎看護学講座 助手

岡 美登里



今回、初めて里親研修に参加させて頂きました。滋賀で生まれ育ち、本学を卒業し、人生のほとんどを滋賀で過ごしてきた私でしたが、この研修では初めて見聞きすることが多く、滋賀の魅力を改めて感じました。はじめに長浜市にある渡岸寺観音堂の見学をしました。日本にある中で最も美しいとされる十一面観音をゆっくり拝見させて頂くことにより、繁忙な毎日の私にとっては、心が洗われる時間となりました。その後、湖北にある診療所の見学、在宅療養されている方への訪問に同行させて頂きました。高齢社会の中でも特に高齢化が進んでいる湖北地方では、地域住民も医療従事者もその地を愛し、そして医療従事者は互いに協働し、熱意をもって地域住民を支えておられる姿に感銘を受けました。滋賀には広大な琵琶湖があり、自然も豊富でかつ歴史も深く、もっともっと滋賀についての理解を深め、その魅力を発信していきたいと思いました。そして、学生にとっては、地域医療の実際からその重要性についての理解を深めることができ、そこで働く人々からの熱のこもった話はこれからの勉学の励みになったことと思います。ご協力頂いた皆様に心より御礼を申し上げます。

研修に参加して

滋賀医科大学医学部看護学科
公衆衛生看護学講座 特任助教

清水 奈穂美



研修では、へき地医療拠点病院として、山間部の巡回診療や訪問診療、医療・保健・福祉・介護のチームによる地域包括ケアを実践されている湖北病院を訪問しました。

湖北病院では、病院が様々な機能を持ち地域包括ケアシステムを推進されていました。例えば、病院の中に地域包括支援センターを設置し、病院に受診しながら介護も相談できる機能を併せた「ワンストップ相談窓口」を実践されていました。また、地域で暮らす高齢者の個別ケアから、地域の課題を見出し、医療と介護の多職種チームが集まり話し合い、地域ぐるみの支援を検討されていました。まさに、地域包括ケアがここにある！と感じました。

限界集落もあるこの地域で「地域住民が、住み慣れた場所で、その人らしく暮らすこと」を支えるために「何ができるのか」を考える病院の在り方を教えていただきました。地域医療を担う次世代の学生たちと共に、このような研修に参加する機会をいただき、ありがとうございました。

宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学 医学科第5学年 木内 亮平

私自身、宿泊研修には1年次から参加させて頂いてありますが、気づけば5年生になり、今回は遂に参加者内で最高学年となりました。参加できるのは残り少ないと思うと、感慨深くなります。思い返しますと、本当にたくさんの方々にお世話になってきてまして、今回もたくさんの方々との出会いがありました。

私は滋賀生まれ滋賀育ちですが、この宿泊研修に参加させて頂くたびに、滋賀の知らない魅力を知る事ができ、そして各地域で医療・福祉に携わっておられる素晴らしい先生とお会いする事ができ、毎回参加する事を楽しみにしております。

今回の宿泊研修をコーディネートしてくださった松井善典先生から「連携」の大切さをお話して頂きました。施設間・多職種間の連携のためには、それぞれの立ち位置を知り、相互理解する事がベースとなっている事を知り、学生の内から、この研修を通して、そのベース作りをさせて頂いていると実感しました。良き地域医療の実践者になれるよう、益々研鑽を積んでいきたいと気持ちを新たにしました。



▲永原診療所

滋賀医科大学 医学科第3学年 山崎 智加

研修では実際に病院や診療所、施設で働かれている方々のお話だけでなく、その地域がどういった場所なのかの案内もあり、湖北という地域、そこで働くということが感じられたように思います。

湖北医療圏では長浜市の南部に医療施設が固まっていると感じていて、広い湖北地域全体ではどう回っているのか、過疎が進んだ地域の診療所の実態はどうか、と疑問は多かったのですが、研修の中で、湖北地域全体で協力体制があり、地域は守られているのだと感じました。

宿泊研修に参加したのは初めてでしたが、地域で働くイメージを持つ良い機会となり、大変有意義であったと感じています。

滋賀医科大学 医学科第2学年 林 知毅

今回の研修は湖北地域の地域医療見学でした。診療所と中核病院の連携など地域で完結する地域医療の形態を知ることができ、さらに地域医療に対する興味が増しました。豪雪地帯である湖北ならではの苦難や対応するための工夫についても学ぶことができ有意義な研修でした。また、曳山祭や、向源寺の国宝などの文化財、長浜の観光街など湖北の方が誇るものが沢山あるのだなと思い、土地柄を知ることが大切だなと思いました。

滋賀医科大学 医学科第5学年 呉 方舟

今回、里親研修に初めて参加させて頂きました。私は彦根出身で、湖東・湖北の地域医療に興味があり、今回、長浜を中心としたプログラムだったので応募しました。1泊2日の研修で、初日は長浜市長をはじめとして、各先生方に長浜における医療の現状を講義して頂いただけでなく、国宝の仏像を鑑賞したり、長浜市内を観光したりすることができました。単なる勉強会に留まらず、町としてその地域が好きになる/興味をもつようにプログラムが組まれていたのが印象的でした。2日目は、地域医療を担っておられる診療所と、地域の基幹病院の両方を見学することができ、とても満足度の高い研修となりました。次回以降も参加したいと考えています。

滋賀医科大学 医学科第2学年 雪上 晴加

今回宿泊研修に初めて参加させていただいたのですが、長浜地域の歴史や文化をはじめとして、豊かな自然や病院、診療所の様子などを見学させていただき、大変有意義な時間を過ごすことができました。その中でも特に印象に残っていることが2つあります。

1つ目は僻地医療の大変さと行政についてです。私は2日目に塩津診療所で長浜地域の医療について伺ったのですが、医療資源不足によって使うことのできない医療器具も多い環境においては、医師同士の専門を生かした協力体制や、診療所と病院の協力が欠かせないと教えていただきました。

2つ目は長浜の豊かな伝統文化についてです。今回の研修の中では長浜地域をガイドの方に案内していただいたのですが、特に曳山は素晴らしく、心打れました。こういった文化をはじめとした滋賀県の北部の魅力を、より多くの人に知ってもらいたいと思いました。

2日間大変有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。

宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学 医学科第2学年 清原 華也

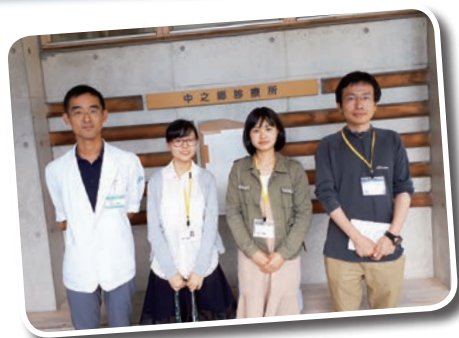
3回目の参加となる今回の里親研修旅行では、診療所を訪問させていただくことを通して、湖北の医療状況について学ばせていただきました。様々なお話を聞かせていただき、大変勉強になりました。中でも、最も印象に残っているのが、中ノ郷診療所の松井先生のお話です。松井先生は、医師の役割は診断をつけ、妥当な治療方針を提示することであり、医師一人では治療の「目標」を決めることはできないとおっしゃっていました。チームや患者さんの目標を決定する際には、その患者さんの生活、家族との関係などの様々な要因を考慮しなくてはなりません。そして、その情報は医師一人では収集することは不可能で、看護師さんやケアマネージャーさん、ソーシャルワーカーさんなど他職種の方々との連携が重要になってくると話してくださいました。松井先生のお話を受け、私は再度「チーム医療」の大切さを実感しました。そして、そのような連携を築くには、今からひとつひとつの人の関わりを大事にし、人とのつながりを作っていくことが重要であると感じました。里親研修旅行でお世話になった皆様、ありがとうございました。

旭川医科大学 医学科第4学年 白井 鈴華

この度は、春に続き参加させて頂きました。今回の研修で印象に残っているのは、中之郷診療所にて松井先生が診察する様子を拝見できたことです。とくに、先生が仰っていた連携の大切さを実感いたしました。連携は地域と大学病院間の医師同士でも行わないと、患者が遠くまで通いつづけ大変な思いをするというケースに遭遇しました。

また、長浜赤十字病院の見学では、研修医の先生にもお話を伺うことができ、研修病院選びの候補につながりました。

私のように、北海道のような離れた地にいると、滋賀県の医療の現状はわかりかねます。しかし、里親宿泊研修は県外の学生にも門戸を開いており、情報収集及び交流の場を与えて下さいます。今回の研修では誠にありがとうございました。また参加していきたいと存じます。



▲中之郷診療所



塩津診療所▶

滋賀医科大学 医学科第2学年 赤羽 紗由美

里親の宿泊研修は今回2回目でした。前は比較的医療が充実している湖南地域でしたが、今回はその逆、医療不足が謳われる湖北地域ということで、どのくらいの差異があるのか興味がありました。それが最も顕著だと感じたのは診療所見学でした。私は塩津診療所を見学させていただいたのですが、規模の小ささ、スタッフの少なさに驚きました。人員不足の問題解消のために、永原診療所と合併して西浅井地区診療所となることが決定しているようですが、患者さんの通院の面での問題が発生してしまうなど、湖南地域では見られなかったような課題を全面的に解決する難しさを感じました。

また、診療所の役割は、軽度なのか重症なのかを判断し、時に少し距離的に離れている大きな病院に紹介するというものですが、それを医師に見捨てられたと感じる患者さんもしらっしゃると聴き、信頼関係を築く重要性が大きいと感じました。

今まで医療に恵まれている地域にしか住んだことがなく、今回初めて医療不足が謳われる地域を訪れたのですが、ここまでちがうものなのかとカルチャーショックを受けました。この研修に参加していなければ、もしかしたら知ることがなかったかもしれない経験ができ、大変貴重な機会となりました。

滋賀医科大学 医学科第4学年 大東 親生

今回の宿泊研修を通して私が感じたことは、これは滋賀県内一般に言えることでもあると思うが、人々が互いに協力しながら自分たちのことは自分たちで決めるというような強かさである。歴史深く、その文化を途絶えさせず継続させてきた長浜の人々は優しく、また病院の雰囲気、診療のやりとりから推察したものだが、医療に対してただ受け身になったりあるいはただ不満を言うのみではなく自分の意見を述べ、互いに協力しようという姿勢を私は感じた。

人のつながりこそ尊いものである。

ただ表面的にとりなすという関係でなく互いが互いを尊重しながら協力し合うということがあれば、深い意味のある医療が行えるのではないかと。それはおそらく、それが一体どんな意味がありどんなものかはよく分からないが、ただシステムとして機械的に行われる医療のみならず、人の信頼のもとに行われる営みとしての医療なのだろうと思う。そうした医療を行う、あるいは行いたいという意思を、現場の医師、住人の人々、街の雰囲気から今回私は感じたように思う。

宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学 看護学科第3学年 丸山 晃帆

今回の研修を通して、長浜市と一言で言っても、北部と南部では全く様相が異なるということがよくわかりました。南部には黒壁スクエアなどの観光地やショッピングセンターがあり、地域の拠点となる病院もあり、とても生活しやすい環境が整っていると思いました。しかし、北部にはコンビニもなく、診療所しかないため、買い物に行ったり、急に体調が悪くなった時に受診したりするには、非常に不便を感じるだろうなと感じました。

研修2日目は、地域包括支援センターの職員の方に同行させていただきました。その日は、ある利用者さんの自宅の草刈りが行えるように利用者さんとシルバー人材の方との橋渡しをされていました。自宅の草刈りという一見すると医療や介護には関係の無さそうな、生活に密着したことまでサポートしているということを知って驚きました。草刈りを行うことで、訪問看護や訪問介護の職員がその利用者の自宅を継続して訪問できるようにするという意図があつてのサポートであるという話をうかがいました。利用者が継続して医療や介護サービスを受けることができるように後方支援を行うことも地域包括支援センターの役割であるのだなと思いました。利用者さんは包括支援センターの職員さんをととても信頼されている様子で、職員さんも利用者さんの生活の様子や考え方を細かいところまで把握されていたのが印象的でした。

地域で暮らしておられる方の支援をする際には、その人の方のことをよく知り、信頼関係を構築することが重要であるということ学びました。

滋賀医科大学 看護学科第1学年 谷口 涼音

1日目は、湖北病院中河内診療所に訪問させて頂いたときに、診察室がとても狭く感じたのですが、先生が「この診療所は広い」と仰っていてとても驚きました。

2日目は、地域包括センターの保健師さんが担当の患者さんのお宅に訪問されるのを見学させていただきました。保健師さんは長い時間をかけて患者さんとの信頼関係を築き本当にたくさんのことを理解されていて、保健師さんってこんなにすごい仕事をしてるのだと思いました。全然知らなかった保健師の仕事について少し知ることができました。

今回の研修でたくさんのことを学べることで、参加して本当に良かったと思います。

滋賀医科大学 看護学科第3学年 村木 まひろ

今回で里親研修に参加させて頂くのは4回目になりますが、今回も自分では普段なかなか訪れる機会のない地域へ研修に行かせてもらい、滋賀県の出身の私も知らなかった滋賀県の魅力やさらに過疎地域の医療の現状を知ることのできた良い研修になりました。

今回の研修で印象に残っているのは、松井先生がおっしゃっていた連携という言葉です。湖北地域には4つの病院と98の診療所があり、それぞれの役割を全うし、必要な時は互いに連携することで、地域の人々の医療を支えています。また、施設単位だけでなく職業単位でも多職種が連携を行うことで、様々な面からのサポートが可能になっています。そのような連携の姿を見せて頂いたことで、連携をする上で自己の役割は何かを理解し、自己でできる仕事と連携が無いとできない仕事を判別することが大切なのだと感じました。

最後に、研修で訪れた施設や地域の方々には大変お世話になりました。ありがとうございました。

滋賀医科大学 看護学科第1学年 米澤 瑞乃

私は今回、初めて参加させていただきました。参加した理由は、私は他府県出身なので滋賀のことを知りたいと思ったからです。また、地域で活躍されている方々と直接話しをすることで、地域医療の実際を知ることができると思ったからです。今回は長浜市ということで、長浜の歴史を学んだり、美味しい料理を食べることができ、たくさんの魅力を発見することができました。また、地域訪問にも参加させていただきました。地域で生活する人々に寄り添うことの重要性、難しさ、やりがいなどを学ぶことができました。次回も是非、参加したいと思っています。今回は本当にお世話になりました。



▲湖北病院

宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学 看護学科第1学年 飯田 野々華

初めての宿泊研修、参加させていただきありがとうございました。長浜は、私が住んでいるところとちょうど対岸にあり、なかなか訪れる機会もないので今回参加できて良かったと思っています。

縦横に長い長浜ですが、端から端まで地域見学させてもらいました。そのおかげで、医療が十分ではないところの実情やその苦勞を知ることができました。今回知った長浜の医療や文化、地域の特性など、これから看護師として人と向き合う際に繋げていきたいと思いました。

滋賀県堅田看護専門学校
看護学科第1学年 井上 有里菜

2日目の長浜赤十字病院に行って、看護学生になってまだ半年も経ってなくて看護師がどのように働いているのか全く知らなかったのがとてもよかったとおもいました。また病院内の施設で、なかなか行けないヘリポートや手術室の中まで入れたことがとても印象的でした。救命センターではドラマでしか見たことがなかったので、とても緊迫した状態が続いていると感じました。

看護副部長のお話が聞けてとてもよかったとおもいました。1日目の夜の食事では、いろんな病院の先生や看護師さんの話が聞けてとてもためになりました。話をしていると色々看護師になってからの苦勞や何故看護師になったかなど、これから役立つことをたくさん教えてもらいました。

また、長浜市はあまり行ったことがなく、どういうところが全く知らなかったのが、今回の研修で知れて良かったです。私はまだ1年で自分が看護師としてどうなりたいかまだはっきりと決まっていますが、今回の研修を機にこれからどうなりたいか、また、どう勉強すればいいかなど、しっかりと考えていきたいと思います。

滋賀医科大学 看護学科第3学年 服部 友里亜

今回の宿泊研修では、湖北地域の医療や歴史を学び、人々の温かさを感じることができました。医師不足などでその病院や施設だけでは解決できないものは、他の病院と連携し協力しながら、その地域の人々の健康を支えているのだと学びました。自分たちの病院の強みや弱みを考えて、それぞれの病院や施設が機能しているのだと学びました。

湖北地域の歴史についても学び、こんなにも歴史的に価値のあるところなのだ初めて知りました。特に、長浜曳山祭は豊臣秀吉の時代から続いているといわれており、5歳から12歳の男子が本格的な狂言を演じるということで、伝統がとても大切にされているのだなと思いました。しかし、湖北地域の中には人口がどんどん減り、子どもはいなくていずれば廃村になるという村もあると知りました。今まで人々が生活していた場所がなくなってしまうということで、寂しいなということも感じました。

今回の研修ではそれぞれの病院や施設が学生を温かく受け入れて下さり、湖北地域の人々の温かい雰囲気を感じることができました。湖北地域で働く方々は、その地域が好きで、その地域のために自分には何ができるだろうか、何をすべきなのかを考えておられました。みなさんの熱意がとても伝わってきました。研修に参加した他の学生とも多くの交流ができ、とても充実した2日間でした。ありがとうございました。

滋賀医科大学 看護学科第1学年 池田 はるか

今回の研修での一番の収穫は、医療の実際を見ることができ、今後の学習へのモチベーションアップにつながったことだ。1回生ということもあり、まだ実際の現場を見た経験が少なかったが、病院見学や訪問看護を通して将来の私の姿がイメージでき、大学での授業にもっと意欲的に取り組もうと考えるきっかけになった。また先生方との懇談会では長浜地域での医療の特徴を実際にお聞きすることができ、交通の便が悪いため病院までいきにくい高齢者が多いから往診や訪問看護を積極的に取り入れるなど地域の課題に向き合っておられる姿を見て地域に根差した医療を感じた。

長浜の歴史についてもボランティアさんが詳しく解説してくださり、滋賀県民だけれども知らなかった滋賀について知ることができ、自分の生まれ育った滋賀についても詳しくなることができた。

将来につながる貴重な経験ができた2泊3日になった。



▲湖北病院

地域自慢 ⑬

～余呉の冬景色～

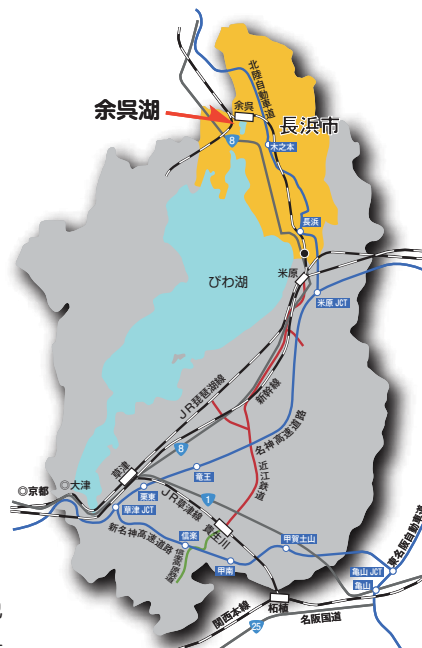
●地域自慢シリーズ 第13回



余呉駅からの雪景色

余呉中之郷診療所に来るようになってから2年半になりますが、冬は大変でしょうと言われる事が度々あります。中之郷から更に奥にある出張診療所に行った時、地元の人から昭和56年の豪雪の時には電線をまたいで向かいの家に行ったなどという嘘のような話を聞いた事もありました。余呉と言えば時雨や雪が連想され、どちらかと言えば寒々としたイメージが浮かびますが、雪などほとんど見た事もない和歌山に育った私には、雪国と聞けば未知の世界であり、ある種憧れの地でもありました。

京都から新快速一本で真冬の余呉駅に降り立ち、目の前に広がる雪景色を見たときは、しばし息を呑みました。駅のすぐ近くには余呉カーブと言われる場所があり、知る人ぞ知る撮影スポットです。適度なカーブで車両



余呉カーブ

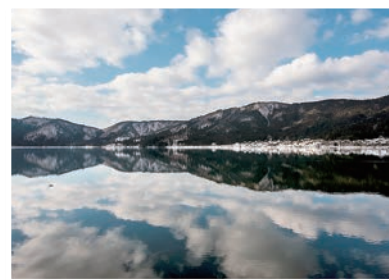


走り去る電車の後ろ姿



霧氷

全体が電柱に遮られることなく写ります。又駅の構造上線路をまたいで走り去る電車の後ろ姿を撮ることも出来ます。他の駅では考えられません。SNSで紹介され外国からの観光客も撮影に訪れるとの事です。ある日、診療所に行く途中木の枝がキラキラ輝いているのに気付きました。雪かなと思いましたが霧氷で、初めて見る光景でした。しかし何よりも綺麗なのは冬の余呉湖です。昔から鏡湖と言われ鏡のような水面に景色が映りこみます。日本のウユニと言われる所以です。今年の冬は湖面が凍結しました。氷っていない水辺に集まる水鳥の姿も趣きが有ります。大雪になれば地元の人々は除雪、雪下ろしで大変なことは分かっていますが、降れば降ったで大阪や京都では味わえない光景が見られます。余呉湖は一周しても7kmです。素晴らしい雪景色を経験して頂くために冬の余呉湖に一度来て頂ければと願っています。余呉に対するイメージががらりと変わると思います。



水面に映りこむ景色



凍結した湖面



水辺に集まる水鳥

文：中之郷診療所 管理者／琴浦 良彦

Interview

長浜市立湖北病院 副院長(小児科部長)

東野 克巳



**天地神明にさからうことなかれ おごるべからず
生き死にはものの常也 医ノ道はよそにありと知るべし**

まずは簡単に経歴を紹介する。昭和40年滋賀県長浜市(旧・伊香郡高月町)生まれ、滋賀県立虎姫高校→自治医科大学(平成2年卒業)。滋賀医科大学(医学部附属病院)助手を経て平成9年～東近江市湖東診療所に16年間勤務。滋賀医科大学学外臨床実習、診療所実習の指導に携わる。平成26年～長浜市(湖北病院)に転任。

身長180cm、体重9? Kgの巨漢…自称“泣く児も黙る”小児科医。好き

なもの：親子丼、ラグビー、阪神タイガース、ふるさと(滋賀県)、そして

子どもたち…。座右の銘は「…生き死にはものの常也 医ノ道はよそにありと知るべし」。漫画「ブラック・ジャック」の中の一文である。

医者になって28年。短い命を終えた新生児、癌と懸命に闘い61歳で逝った叔父、多くのご家族に見守られて天寿を全うした100歳の在宅訪問診療患者さん、不測の事態で死に至ったと推定された検死の方…多くの“死”に立ち会ってきた。

一人の医者にできることは限られて

ている。「人間が生きものの生き死にを自由にしようなんておこがましいとは思わんかね」…これも「ブラック・ジャック」に出てくる言葉だ。

“医者になる”と決めたのは小学生の頃。小学校区内に医療機関が無く、病気の時は少し遠くの診療所まで自分で自転車を漕いで行った。幼心に地域(へき地)

医療に目覚めたのかも知れない?。ちょうど、漫画「ブラック・ジャック」がリアルタイムで連載されていて、医療の世界に興味を持った。ただ、ブラック・ジャックのようなスーパードクターになろうと思ったのではなく、「病気の子どもを優しく見守る診療所の(小児科)医師」の姿に憧れた(のだと思う)。



▲自治医大の同級生と
平成27年7月札幌にて



▲16年勤務した東近江市湖東診療所



▲「ブラックジャック・ザ・カルテ」=漫画ブラックジャックの解説書。著者「ブラックジャック症例検討会」の一員です。



▲4か月児健診



▲訪問診療

～現在勤務する長浜市立湖北病院周辺の豊かな自然と文化～



▲長浜市立湖北病院



▲海津大崎の桜



▲木の本地蔵

医者としての生活は、滋賀医科大学小児科からスタートした。医師2年目、小児科同門会（童心会）会誌に新入会員紹介の挨拶文を寄稿した。



▲自治医大ラグビー部
試合中のひとコマ

2年ぶりにカンペイ（長野県菅平高原）に登った。土産物屋、ラグビーショップ、ペンション…2年もたてばずいぶん変わるなぁ…と到着したとき最初に思った。しかしそこには毎年変わらない合宿にあげくれるラグーマンの姿があった。土のにおい、汗のにおい、高原のさわやかな空気も手伝って久しぶりに心がリフレッシュされた気分であった。東医体、なつかしい赤ジャージに身をつつんだたくましい後輩たちの姿がそこにあった。ノーサイドの笛が鳴るまでここちよい緊張感を味わった（自分でプレーしている方がよっぽど気が楽だ。しかし、2年もたてば後輩もずいぶんうまくなるもんだなぁ…）。翌日、帰ってきた自分には、コンクリートの壁の病院が待っていた。

この2年で自分も変わった。医者になった。結婚して子どももできた（ちなみにとてもかわいい）。しかし、かわらない自分があることを改めて確認した。ラグビーの時の緊張感、子どもたちを思う気持ち。幼い頃から（なぜかわからないが）小児科医になりたくてこの世界に飛び込んだ。いつまでも子どもたちの幸せを願い続ける小児科医でありたい。

学生時代、ラグビーをやっていた。練習がきつく何度も「辞めよう」と思ったことがあったが、仲間にもまれて最後まで続けることができた（チームは強かった…在学中に東医体6年連続優勝）。ラグビーはそれぞれのポジション毎に役割が違うが、チーム全体で一つのボールを繋ぎトライを目指す。現在実践中の医療・福祉・保健・介護の多職種連携 地域包括ケアにつながるものがある（と思っている）。

5年生の秋、小児科臨床実習と東医体公式戦の日程が重なった。①休暇中に実習補習をすること。②小児科をきちんと勉強すること。③優勝してくること。を条件に実習欠席許可を頂いた。課題の3条件は難なく？クリアできた。“将来は小児科”と決めていたこともあり、国家試験対策などは小児科を軸に勉強していた（小児科の定期試験・卒業試験は満点であった）。小児科には、循環器、神経、感染症、血液、内分泌その他諸領域が含まれ、内科外科などと共通することも多く系統的に勉強できた。自分にはこの方法が合っていたと思う。国試対策の勉強方法の一つとしてお勧めしたい。



▲15年以上続けている小学校保健の授業／手作りの参考書（写真下）4年生を対象に生活習慣病の授業をしています



▲次女の高校入学式にて

長期休暇中は、（自ら志願・希望して）先輩の勤める診療所などへ実習（研修）に行った。6年生の夏休みは、滋賀県立小児保健医療センターに2週間お世話になった。どの実習もとても勉強になった。後輩たちを指導し良き医療人を育成することで恩返しをしたいと考えている。学生時代しか行けない海外旅行をしておけばよかった？…とたまに思うが、当時はそんな気もお金も無かった。ただ、学位論文審査語学試験の時は、「学生時代もうちょっと英語を勉強しておけば…」と思った。

賤ヶ岳山頂からの眺め



▲琵琶湖（竹生島）



▲余呉湖



天女の羽衣伝説がある余呉湖畔の柳
樹齢150年
2017年の台風で根こそぎ折れてしまいました

▲余呉湖畔～冬の朝

医療法人敬愛会 東近江敬愛病院

病院の概要

◆経営理念：敬 天 愛 人

◆診療科：外科・消化器外科・肛門科・乳腺外科・内科・循環器内科・消化器内科・糖尿病、代謝内科・整形外科・リハビリテーション科・皮膚科・泌尿器科・脳神経外科・人工透析内科・脳神経内科（物忘れ外来）放射線科・麻酔科・心臓血管外科

◆病床数：154床（一般60床、医療療養94床）

◆外来患者：200名、入院患者 150名、透析患者 120名



病院正面

理事長・院長メッセージ

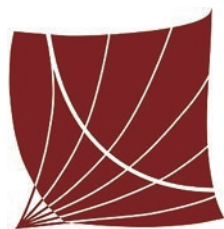
東近江敬愛病院は滋賀県“琵琶湖”の東部「東近江市」にあります。名神高速八日市インターから約3キロの位置にあり、田舎ではありますが交通の便は大変良いところです。

平成18年に、1市6町が合併して東近江市が誕生し、当院の名称も現在のものに改名致しました。以前は、“山口病院”と申しまして、前理事長 故 山口睦彦先生が強いリーダーシップのもと築き上げられた病院でございます。私は、昭和63年に京都府立医大第一外科より山口病院院長として赴任し、平成14年からは医療法人敬愛会理事長に就任、現在に至っております。

当院の経営理念である“敬天愛人”は、前理事長と同郷の西郷隆盛が好んで使った言葉でもあります。私は赴任時より、この言葉が大変気に入って、医療人として・人間として必要な言葉と思い、新しい病院の名前にも使わせて頂きました。尊敬する前理事長の意思を受け継ぎ、また新しい市の誕生と共に、新たな病院の歴史を作ることの意味する命名であります。

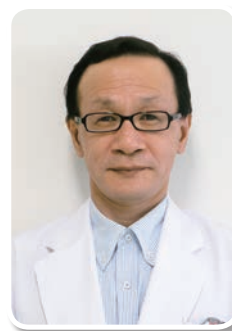
当院は、開院当初より救急病院を告示し、外科・整形外科を中心として増床を重ねて参りました。地域の要望もあり、内科・透析・健診センター等の開設も行い、また近年は、デイケアセンター・居宅介護支援事業所・訪問リハビリなど介護事業も併設致しております。福利厚生の一環で保育所も設置し、看護師さんなどの離職防止にも努めております。めまぐるしく変化する医療情勢に柔軟に対応出来るように、日々模索している状況です。

平成17年末より、本館が築40年以上を経過しておりましたので増改築工事に着手致しました。既存棟の解体、新棟の建設と長い工期となりましたが、平成19年7月ようやく竣工しました。新築に伴い、MRI装置をはじめ医療機器の入れ替えも行いました。基本方針である“専門的で、より良質な医療”が提供できるように努める所存であります。また、新病院には、中央ホールに日本庭園を設け、外来待合ホールには母子のブロンズ像を設置しました。高齢化する患者様への心のケアに対し少しでも配慮できればと思っております。また、当院が位置する旧の八日市市は、国の無形民俗文化財に選定されている“大風”で有名な町でございます。年に一度“大風まつり”が行なわれ、100畳をこえる大きな風が空に舞います。これにちなんで新しい病院のシンボルマークも大風をイメージして作成致しました。



病院シンボルマーク

平成23年には人工透析室を36床に増床し、現在では120名近い透析患者様の受入れを行っております。また、平成24年に「子育てサポート企業認定くるみんマーク」を取得し、病院を挙げてワークライフバランスの推進に取り組んでおります。平成28年には、当院の予てからの夢でありました電子カルテを導入いたしました。当初は、なかなかうまく稼働しませんでした。2年たった今では、電子カルテなくては診療できないくらいになりました。

理事長・院長
間嶋 孝

看護部メッセージ

看護部長 小池 眞理子

東近江敬愛病院の看護部は、一般病棟のA病棟、医療療養病棟のB・C病棟と外来、人工透析の5部門で、「地域の人々に安心と信頼の看護（介護）を提供します」を看護部の理念に掲げ看護（介護）を行っています。

さらに、平成21年から筑波大学名誉教授の紙屋克子先生に講義を受け、ナースングサイエンスアカデミーの原川静子先生に技術指導を受けながら、当院のNICD学会認定看護師3名を中心に「遷延性意識障害や廃用症候群患者の生活行動回復」を目指した看護プログラムの実践に取り組んでいます。

意思表出の方法や嚥下機能の改善等「看護力」の素晴らしさを体験しましょう。



人工透析室 紹介

全36床のベッドで、安心・安全な透析治療を心がけています。

無料送迎や、透析中のリラクゼーションなどのサービスを取り入れています。

長時間透析による身体的苦痛、便秘解消、下肢のつれなどに効果をもたらしています。スタッフによる上下肢の微振動やバランスボールによる圧迫、自分自身で下肢の運動もされています。今後も継続していきたいと思います。



今後の方向性

21世紀に入り、医療業界は激動の時代を迎えたと言えます。改正が行なわれるたびに医療費の削減が行なわれ、一寸先を読むことさえ厳しくなっています。その要因は、高齢化の急激な進展です。超高齢社会がもたらす医療費の増大、医療の質の変化が社会問題となり、その煽りを医療機関が受けているものと思います。

しかし、医療の主役は患者様です。医療法人敬愛会では、本質である“患者様に信頼される病院”を目指し、良質の医療の提供と患者サービスに努めます。敬天愛人の精神をもって心ある医療を実践致します。

医療法人敬愛会 東近江敬愛病院

〒527-0025 滋賀県東近江市八日市東本町8番16号
TEL：0748-22-2222 FAX：0748-22-2221
<http://www.keiaikai.or.jp/>

滋賀医科大学男女共同参画推進室

滋賀医科大学では、男女共同参画推進室を設置し、仕事と家庭を両立するためのさまざまな取り組みを実施することにより、子育て中の女性医師をはじめ教職員のみなさまにとって働きやすい環境づくりに努めています。

※ 滋賀医科大学医学部附属病院「女性医師支援のためのスキルズアッププログラム」 ※

平成28年11月25日に、本学独自の「女性医師支援のためのスキルズアッププログラム」を設立し、離職した女性医師の医療現場への速やかな復帰を支援しています。



特徴

- 対象者が医療現場を離れている理由・期間を問いません
- 対象者は滋賀県だけでなく近隣の府県からも受け入れます
- 勤務希望の診療科について個別に相談し対応します

対 象 者	業務目的	業務内容
医療現場から離れているがスキルズアップを希望する女性医師	ライフスタイルに合わせた勤務形態により医療技術の向上を図る	診療科の診療業務に従事しながら自らの医療技術の向上を図る
勤 務 先	給 与	職 名
滋賀医科大学医学部附属病院 (診療科については個別に相談し対応する)	時間給 (2,000円)	診療登録医 (非常勤職員)
勤務時間	勤務期間	募集人員
月24時間以内 (平日日勤のみ、超過勤務は認めない)	年度ごとに契約更新する	5名程度
募集期間	応募方法	プログラム終了後、希望があれば 病院 (本学附属病院を含む) への 勤務を支援します。
通年	募集要項に従って必要書類を滋賀医科大学男女共同参画推進室に提出する	

※ スキルズアッププログラムの利用者の状況 ※

※ 2017年1月から2018年12月まで、4名の女性医師が本プログラムを利用

※ 2019年9月より、1名開始予定

	外科学講座 (消化器・乳腺・一般外科)	内科学講座 (循環器・呼吸器内科)	小児科学講座	外科学講座 (消化器・乳腺・一般外科)
採 用 日	2017年1月1日	2017年4月1日	2017年12月1日	2018年6月1日
利 用 理 由	育児からの復帰※	転 居	妊娠・出産	育児からの復帰
現在の状況	継続中	終 了	終 了	継続中

※ 育児で医療現場を約10年離れていたが、本プログラム診療登録医として採用後、指導医のもとで医療技術の向上を図った結果、【マンモグラフィー読影試験で検診マンモグラフィー読影の資格B】を取得しました。

■ 詳細等は、男女共同参画推進室ホームページに掲載しておりますので、ご覧ください

➡ <http://danjokd.shiga-med.ac.jp/skillup>

TEL:077-548-3599 FAX:077-548-3653 Email:hqdanjo@belle.shiga-med.ac.jp

滋賀県医師キャリアサポートセンター

(滋賀県地域医療支援センター) 当センターは滋賀県健康医療福祉部医療政策課と滋賀医科大学医学部附属病院に設置し、滋賀医科大学医学部附属病院には専任医師を配置しています。

先輩医師との懇談会

医師としてのキャリアアップや、仕事を続けていく上での色々な悩みなどを相談できる場として開催しています。自由参加ですので、ご興味のある方は、ぜひ、ご参加下さい。

《平成30年度（第1回）》

平成30年7月5日(木) 17:00～

講師：医師臨床教育センター
副センター長 山原 真子 先生
テーマ：「これから医師として働く皆さんへー自分らしい“キャリア”を築くためにー」



学生の感想

- ・入学したばかりで、医師としてのキャリアプランが全く描けていませんでしたが、先生のお話を聞いて少しイメージすることができました。臨床医として働きながら、他の仕事も出来るというのは魅力的に感じました。
- ・留学に興味があったのでとても参考になりました。

《平成30年度（第2回）》

平成30年10月9日(火) 18:00～

講師：小児科 中嶋 麻子 先生
テーマ：「Going my way. 自分の直感と、したいことを大切に。」



学生の感想

- ・華麗なキャリアを海外で送られた先輩がいかに滋賀に足を落ち着けて医師としてのキャリアを積み重ねることが具体的に伺えてきて、いい機会となりました。
- ・先生が経験された様々なことをお聞きし、こんな道があるんだと強く感じました。これからも好きな事を妥協せず、経験していこうと思います。とても刺激を受けました。

《平成30年度（第3回）》

平成30年11月27日(木) 18:00～

講師：精神科 藤井 彰夫 先生
テーマ：「滋賀県で精神医療を志した理由」



学生の感想

- ・本当に参加して良かったです。精神科や産婦人科、若手医師と熟練医師…など様々な立場から精神科医療の話聞いて嬉しかったです。自分のキャリアをより具体的にイメージしながら検討できるようになりました。
- ・精神科は、専門性が高いため「その道を極めている」方が求められていると思いきや、むしろ他科も診られる方が働きやすいというのが意外でした。



第7回滋賀県女性医師交流会

「みんなが活躍できる働き方改革」を開催しました。

主催 滋賀県女性医師ネットワーク会議



日本赤十字社医療センター

第一産婦人科部長 木戸 道子 先生

演題：「『できない』から『できる』へ変えようーキャリアアップしていくためにー」



「働き方ケースカンファレンス」では、子育て、介護、病気をテーマに、自分自身、配偶者、上司などの立場を想定したシナリオ形式でのケース提示を行いました。その後のカンファレンスでは、医師や医学生などから多くの質問や意見が出され、活発なディスカッションが行われました。

講演後の質疑応答では、臨床経験10数年という女性医師から「今まで私の周りにはロールモデルが居なかった。今後、私がロールモデルになっていくためには、どうしたら良いですか？」という質問が出ました。木戸先生は即座に「あなたは、現在すでに立派なロールモデルです。どうか自信を持って下さい。自分を肯定して下さい。」とお言葉をいただき、参加者全員が、深く感銘を受けました。



【お問い合わせ先】

滋賀県医師キャリアサポートセンター

滋賀医科大学病院管理課内(外来棟3階)

住所：〒520-2192 滋賀県大津市瀬田月輪町

TEL：077-548-3656

E-mail：ishicsc@belle.shiga-med.ac.jp

長浜いきいき健康フェスティバル 2018

「まちのお医者さんと医療系学生健康相談会」

“幸せは心と体の健康から”をテーマに「いきいき健康フェスティバル」が今年も長浜バイオ大学を会場に5月19日に開催されました。

「まちのお医者さんと医療系学生健康相談会」ブースが設けられ、医療面接やコミュニケーションに関心がある医学生・看護学生が、医師の指導のもとに地域の方々の相談を受けました。

住民の方々や学生同士の交流を深める、貴重な体験をさせていただきました。



滋賀医科大学『地域「里親」支援事業』10周年、 認定NPO法人滋賀医療人育成協力機構設立7周年 記念シンポジウムを開催しました

県内の多くの方々のご協力のもと、医療人の育成に取り組んで参りました滋賀医科大学『地域「里親」支援事業』が丸10年を迎えました。また、その取り組みを滋賀医科大学学生だけでなく、自治医科大学の学生をはじめ滋賀県出身の医学生や看護学生への支援へと活動の輪を広げた認定NPO法人滋賀医療人育成協力機構も設立後7年が経ちました。

この節目の年に、これからの滋賀県の医療の担い手である医師・看護師育成の取り組みを展望するために、下記の日程でシンポジウムを開催しました。

日 時：平成31年2月10日(日) 午後3時～5時
場 所：ピアザ淡海 滋賀県県民交流センター 207会議室
テ マ：「滋賀県の医療の担い手は充足しているのか？ 現状と課題を考える」
基 調 講 演：滋賀県健康医療福祉部 理事 角野 文彦 氏
シンポジウム：(シンポジスト) 滋賀県医師会 理事 木築 野百合 先生
滋賀県看護協会 会長 廣原 恵子 先生
滋賀県病院協会 監事 楠井 隆 先生



シンポジストの方々に、現状の報告や今後の方向性などをご講演いただきました。

医療関係、行政、県民の方など、約40名のご参加をいただき、大変有意義なシンポジウムとなりました。

お忙しい中ご参加いただきました皆さま、ありがとうございました。

入 会 ・ ご 寄 附 の ご 案 内

1年間の活動を実施していくための必要経費は年間550万円程度が必要です。皆様からいただいた会費とご寄附 並びに「地域医療を担う医師等育成事業補助金」で賄わせていただいています。

出費がかさむ折とは存じますが「地域の医療を担う医学生・看護学生の育成支援」へのご支援をいただける方々のご協力をお願いいたします。

会員は

会員の種類		会 費	入会金 (初年度のみ)
正 会 員	個 人	年会費 2,000円 + 寄附金 3,000円以上	5,000円
	団 体	年会費 5,000円 + 寄附金 5,000円以上	10,000円
賛助会員		毎年 1,000円以上 できましたら 3,000円以上	

ご寄附・賛助会費をご入金された方は「税制上の優遇措置」【寄附金控除、または寄附金特別枠控除（税制控除）】を受けることができます。

ご入金された方には「寄附金の受領書」を郵送しますので大切に保管いただき、確定申告時には、「申告書」に「寄附金の受領書を」を添え最寄りの税務署にご提出ください。

なお、詳細につきましては、最寄りの税務署にお問い合わせください。



『家庭医体験学習』への参加者を募集します

県内各地で働く医師の働きを医学生に体験してもらう「体験学習」を、滋賀県出身自治医科大学同窓会「さざなみ会」とともに応援しています。

残念ながら、昨年度は参加希望者がおられませんでした。

「体験学習」では、通年体験希望学生を募っていますので、「体験学習」に興味がある方はお気軽に、滋賀医療人育成協力機構事務局にご連絡ください。



毎号12,000部発行する めでる誌上に、
貴病院や企業からのメッセージを載せませんか！

ご希望の方は、滋賀医療人育成協力機構にお問い合わせください。



編集後記



夏の宿泊研修では長浜市と湖北方面を訪問させていただきました。参加学生は永原診療所・塩津診療所・中之郷診療所・湖北病院に分かれてそれぞれの診療所の役割を身近に見学できたことが貴重な体験となったようです。研修でお世話になりました関係者の皆さまに改めてお礼申し上げます。

さて、早いもので滋賀医療人育成協力機構の設立から丸7年が経過し、2月にはこれからの滋賀県の医療の担い手である医師・看護師育成の取り組みを展望するためのシンポジウムが開催されました。テーマは「滋賀県の医療の担い手は充足しているのか？ 現状と課題を考える」です。

これからの高齢化社会における私達の生活のために必要不可欠な医療の担い手の育成のお手伝いのひとつとして、これからも滋賀医療人育成協力機構は活動していきたいと思っています。どうぞ今後ともご協力をお願いいたします。



NPO法人滋賀医療人育成協力機構 広報誌「めでる」vol.15

発行：平成31年2月1日
編集：NPO法人 滋賀医療人育成協力機構
所在地：滋賀県大津市瀬田月輪町 滋賀医科大学内
TEL：077-548-2802 FAX：077-548-2803
Email：satooya@belle.shiga-med.ac.jp
URL：http://www.shiga-iryo-ikusei.jp/